

# 新聞新報

2007年(平成19年)3月6日 火曜日

三たびの春  
中越地震

正

窓枠の「雪囲い」から差し込む光が明るさを増していた。新潟県十日町市中条の仮設住宅で、増田タミさん(81)は、ケアマネジャー「瓶良曉さん(33)」と茶飲み話を楽しんでいた。「最近、美容院に行ったのよ」。長かった髪を切り、口調は軽やかだった。ここで越した3度目の冬。昨年6月には、夫の守平さんを入居していた。

2004年10月23日の新潟県中越地震。木造2階建ての家が傾いた。子供もなく、建て替えはあきらめた。5年過ぎた家が壊されていくのを見て、夫婦で泣いた。その後、「2人でゆっくりに暮らせば」と市営住宅を申し込んだ。

「入居できればいいね」とよく口にした守平さん。もともと体調がすぐれず、避難所、高齢者施設、仮設住宅と転々とするうち、横になる時間が長くなった。高熱を出して入

## 「父ちゃん分まで生きるよ」



ケアマネジャー(右)と談笑するのが好きな増田さん(2月28日、新潟県十日町市)。(佐々木紀明撮影)

院し、2か月後。87歳で息を返し思い続けた。中条の仮設住宅は、ピークの48世帯から10世帯に。一番親しかった人「地震がなければ、夫も家も昨年未だに引っ越した。こも失うことはなかった」。繰んなにさみしい冬はなかつた」。

## 81歳 新たな暮らしへ

仮設住宅 新潟県中越地震では8市町村に3460戸が建設され、ピークの05年3月には2935世帯9649人が生活した。2月末現在、474世帯1389人が入居し、最多は長岡市の324世帯941人。期限は原則2年だが、県は昨年11月、延長の措置をとった。阪神大震災では仮設住宅がすべてなくなるまでに約5年かかった。

それでもようやく泣いていても仕方がないと思えるようになった。「何かあれば、とんでいくから」「いつでも相談ののからね」。ボランティアや親類の励ましが、外へと気持ちを向けさせた。新たな近所つきあい飛び込んでみる気もわいてきた。

一時は「高齢者施設に入ろうか」とも思ったが、決まっていた市営住宅へ9月に入居

するに決めた。雪で白一色だった仮設住宅の撤去跡にも、緑が芽吹き出した。「父ちゃんが楽しみにしていた市営住宅で、父ちゃん分まで生きるよ」。墓前にそう語りかけるつもりだ。

川口町小高の25世帯のうち24世帯は、避難先から他地区への移転を決めている。石坂富雄さん(49)一家は町が勧めた。それから3か月がたつ。補修で住めるようになった高床式3階建て。自慢の暖炉がある居間に久しぶりに友人たちが集まった。近くの山で採れたキノコを入れた鍋をつつく。「自分のうちはやっぱりいいねえ」。6畳間に4人が暮らした仮設住宅では出来なかったことだ。

「仲間と気楽に酒を酌み交わせる場になりたい」と、自宅を「酔庵」と名付けた。「何

よりも先祖から預かっている土地に帰ってきた安心感がある。小高が懐かしくなった人はみんなここに来ればいい」と笑う。

石坂さんは重機オペレーターのアルバイトをしながら再就職先を探し、妻の満代さん(46)も働きに出ている。気がかりは、近くに遊び相手のいない長男の晴哉君(10)と、居間は1人で家にいる母クマンさん(85)のことだ。

だが、移転した人たちの田んぼや畑はそのまま残り、そのうち、多くの人が田植えなどで通ってくる。

石坂さんは「元には戻らないけど、ちょっとほにぎやかになるよ」と、雪解けが進む山並みを見つめた。

震度7を記録し、関連死を含め67人が亡くなった新潟県中越地震。被災地は発生から3度目の春を迎えた。仮設住宅の入居者はピークの7分の1に減った。復旧から、さらに一歩進めて復興へ。新たな暮らしに歩み出す人たちの息吹を伝える。